

# 教皇フランシスコ帰天



Miserando atque eligendo  
いつくしみをもって選ばれた



私たちの善き牧者であった教皇フランシスコは、現地時間4月21日午前7時35分(日本時間同日14時35分)、御父のもとへ旅立たれた。初めての南米出身の教皇として、2013年から十年以上にわたり、これまで手をつけられなかったなかつたバチカンの機構改革や、第二バチカン公会議の成果を踏まえた教会のシノドス性の推進など、力強く教会を導かれた教皇フランシスコの逝去に際して、深い悲しみのうちに、わたしたちの希望の源である御父のもとでの永遠の安息を心よりお祈りいたします。

本名：ホルヘ・マリオ・ベルゴリオ (Jorge Mario Bergoglio)  
生年月日：1936年12月17日  
出身地：アルゼンチン・ブエノスアイレス  
国籍：アルゼンチン  
1969年12月13日：司祭叙階  
1992年5月20日：教皇ヨハネ・パウロ二世からブエノスアイレス補佐司教 任命  
1992年6月27日：司教叙階  
1997年6月3日：ブエノスアイレス協働大司教  
1998年2月28日：同教区大司教  
2001年2月21日：教皇ヨハネ・パウロ二世から枢機卿に叙任  
2013年3月13日：第266代教皇に選出  
2025年4月21日：帰天(88歳)



## 特別号 2025

発行所  
大阪市中央区玉造 2-24-22  
カトリック大阪高松大司教区  
広報委員会  
郵便番号 540-0004  
TEL(06)6941-9700(代表)  
TEL(06)6946-3223(直通)  
FAX(06)6946-3224(直通)  
E-mail kyokuho@ostk.catholic.jp  
編集 広報委員会  
発行人 前田万葉

## パパ様の 帰天寂しや 復活祭

大司教 前田万葉

パパ様のご逝去の報に接し、ご復活祭というのに、悲しく寂しさを感じました。「パパ様の帰天寂しや復活祭」の献句そのものでした。私は、教皇フランシスコに2014年に大阪大司教に任命され、2018年に枢機卿に親任されました。お会いするたびに、温かく迎え、励ましていただき、まさに霊父・教父といえる存在でした。

私がまだ、広島司教だった時、2014年に韓国で行われたアジア・ユース・デーの際にお会いした時に「To Osaka, Takayama Ukon」と話かけられ、私は何のことかわからないうちに、後日、大阪大司教任命が発表されました。多くの人に挨拶をされる機会が多い中で、一人ひとりのことを気にかけて話しかけられる姿に、優しさや誠実さを感じました。預かった一人の青年の手紙を受け取ってくださり、ちゃんと返事もいただきましたし、また、ある市議員に預けられたお米を差し出すと「オオ、ジャパニーズ・ライス!」と、喜んで受け取ってくださいました。

また、教皇は戦争や貧しい人への思いが強かったことから、核兵器の廃絶を求める私や日本カトリック司教団の思いを受け止めてくださり、2019年来日されたときには核兵器廃絶による平和の確立とすべてのいのちを守ることの重要性を力強く発信してくださいました。

バチカンが教皇来日を発表する前に、枢機卿親任の返礼巡礼で訪れたのが、教皇の82歳の誕生日でした。この日に巡礼団でバースデーケーキをもってお会いする機会がありました。とても喜んでくださり、私たちからの「Please Come to Japan」の呼びかけに、このことは「訪日の食前酒(アペリティーヴォ)ですね」とおしゃってくださいました。みんなで教皇来日を確信し、大喜びしたものです。

教皇フランシスコによる第十六回世界代表者司教会議(シノドス)は、司教だけでなく老若男女問わずが集うものでした。これからの教会が、ともに歩む教会=シノドス的「希望の巡礼者」となる糧となりますように祈ります。

そして、これまでの一つひとつの発言を思い出しながら教皇フランシスコの永遠の安息を祈ってまいりましょう。



# ぶれない優先順位

補佐司教 酒井俊弘



「世界」の巡礼

教皇フランシスコはぶれない優先順位を持つ方でした。就任当初から、教皇宮殿に住まい、赤い靴をはかない、胸の十字架は司教時代のまま：など自分の考えをゆずらない姿に、明確な優先順位があるのだと感じました。

その教皇様が最優先にされたのは「いづくしみ」でした。ご自分の紋章に刻まれたモットー「Misericordiae eligendo」の通り、神のいづくしみを訴え、実践し続けられました。教皇就任最初の旅行は、アフリカからの難民が押し寄せたイタリヤ南部のランペドゥーザ島で、「出向いていく」という優先順位の実践でした。2015、16年に「いづくしみの特別聖年」を設け、神のいづくしみについて語り、聖年中は毎月ご自身でも

刑務所や病院などに出向かれまし。個人的な思い出としては、2018年司教に選ばれてすぐに前田大司教とアベイヨ司教とともにバチカンを訪問した際、サンタマルタ館の前でぼつたり出会い、気さくに声をかけていただいた時の笑顔が忘れられません。その後、2019年の訪日では、広報関係者たちの集合写真にサインと言葉をお願いしたら、超過密スケジュールの中、すぐに応えてくださいました。最後にお会いできたのは今年の1月で、日本から来たと言いつつ、目を輝かせて日本にまわり、日の丸の入った巡礼スカーフを祝福してくださいました。誰であつても、目の前にいる人に全力で関わることです。

帰天の知らせを聞いてすぐに思ったのは、「結局帰られなかつた」ということです。2013年3月にコンクラーベのためにトランク一つでローマに行ったその旅は、片道旅行となりました。使徒的訪問で中南米の多くの国を訪れ、隣のチリやパラグアイに

は行かれたのに、アルゼンチンにはどうとう戻られませんでした。故郷に錦を飾ることは、教皇の優先順位の上位にはなかつたのです。バチカンニュースが帰天にあたって発表した動画

者として」の日本を含む多くの肉声は、2023年8月リスボンでのワールドユースデーのもので、私もその場で聞いていた言葉です。「Todos, todos, todos! (みんな、みんな、みんな!)」と「Vayamos adelante, sin miedo! (共に前に進みましょう、恐れずに)」。誰をも排除しないいづくしみの心と、希望をもつてともに前に進むという熱意のこもった言葉です。教皇のこの遺志を皆で継いでいきましょう。教皇様、これから私たちみんなとともに歩んでください。

## 共に歩んだという確信

フランシスコ教皇に別れを告げる イエズス会司祭 デルカ・レンゾ

その知らせは突然やってきました。考えて見れば、死はいつも突然やってくる。実は私たちがそれを予期していません。しかし、死は訪れるものであり、たとえ私たちがそれを望んでいなくても、死は人びとを連れ去る。たとえそれがローマ教皇であつても。

フランシスコ教皇は、最後の仕事を終え、天の門を開いて、向こう側に渡りました。向こうではどうなっているかわかりませんが、聖年の復活の祝日は旅立つに最高の日だったでしょう。

今感じていることを表現し難い。しかし、悲しみよりも、彼がこの世での時間を全うし、彼の使命は終わったとい

## 教皇フランシスコ帰天に寄せて

イエズス会司祭 山内保憲 (大阪高松教区出身)

これは、私の告白である。私は教皇フランシスコに怒られた経験がある。2019年教皇来日に先立って、教皇から修道会を通してリクエストが届いた。当時、私は高齢になったイエズス会会員の介護を担当していた。教皇は滞在中に、私が介護を担当していたアドルフ・ニコラス神父と会うことを希望された。

ニコラス神父は、イエズス会のトップである総長を勤めた人物であつた。彼は、イエズス会会員である教皇フランシ

スコに教皇就任の許可を与えた総長であつた。残念なことに、そのニコラス神父は神経の病をおっており、その時には自ら話すことも食事をとることもできない状態であつた。特別なケアが必要であつたため、病院で治療を受けていた。彼を教皇の滞在先まで移動させることは困難だと伝えた。すると、教皇は教皇自身ニコラス神父のいる病院まで訪問できるように手配せよと指示をしてきた。しかし、警備や過密なスケジュールの関係で教皇の病院訪問は不可能だと返答した。三度目に教

皇はメールを私の長上である管区長に送られた。管区長は私を呼び出し、「山内神父、教皇は怒っています。あなたが世話している会員を全員、教皇が訪問する上智大学まで連れて来なさい」と書いている。これは命令です」と伝えられた。教皇に命令されてしまえば仕方がない。私は、ニコラス神父が入院していた病院の医師や看護師に頭を下げてまわつた。結果として、3台の介護車や民間救急車、5人の医師に3人の看護師、そのほか多くの人の助けによって上智大学まで、14人の司祭・ブラザーを無事にお連れすることができたのである。教皇に謁見した司祭・ブラザーの表

情が忘れることができない。認知症の神父も車椅子の神父も皆、喜びに満ちていた。

私はこの体験を、教皇フランシスコからの教えとして受け止めている。私たちは、合理性やさまざまな理由をつけて弱くされている人びと、周縁に追いやりられている人びとを見捨て、切り捨ててしまふ。過密なスケジュールの中でも病人たちを会うことのために時間を割かれた教皇フランシスコは、私に「どんな小さくされている人も一人も見捨てるな」と厳しく注意されたのであると思う。教皇フランシスコの教えを忘れずに、これからの人生を歩んでいきたいと思う。

フランシスコ教皇への感謝で一杯です。

若いときから彼は人間の暴力にさらされて平和がどれほど大切かよく分かつていた人でした。教皇になつてからもその姿勢が変わりませんでした。教皇フランシスコは、平和を求めることが人間に欠かれないものであり、いくら正当化しても戦争は問題解決にならない現実を伝える使命を受けていたように思います。

彼は聖座在中に世界平和が深まることなく、対立が続けることを最後まで残念に思つたに違いありません。教皇フランシスコの教えを継ごうとするならば先ず世界平和を訴えるべきでしょう。それは宗教、国籍を超える人間に欠かさないものであることを意識しなければなりません。さまざまな分野で貢献した彼です

が、平和への思いが一番のメッセージだったように思います。

よく考えれば、フランシスコ教皇が去つたというより、帰つたのです。フランシスコは御父の家に帰られたのです。私のように、数年間共に歩む機会に恵まれた者にとつても、それはいつも少なく感じます。もつと分かち合いたかつた、もつと質問したかつた、もつと感謝したかつた、残念がります。それはもう叶いません。しかし、私たちの信仰が教えていますように、煩いや忙しさから解放され、時間が問題にならなくなります。その変わり、感謝、問いかけ、分かち合う時間が与えられる世界があります。まだ気づかないのは残念ですが……結局のところ、私たちは皆、神の愛と救しを必要

として、限りある弱い存在なのですから。

ありがたう、フランシスコ。安らかに眠ってください。あなたはそれに相応しい人です。福音書にあるように、主はきつと両手を広げてあなたを迎えてくださるでしょう。そこから、私たちを導き続けてください。私たちはまだ学ぶべきことがたくさんあり、間違いなく、あなたが私たちに残してくれたものは良い材料です。この巡礼の旅の一部をあなたとともに歩むことができたこと、そしてその日が来れば、あなたにお会いし、今はできないことを直接お礼を申し上げることができると知っています。

れしく思います。